

## 共に生き、活かし合う暮らし

—— 単独型ショートステイセンターでの  
暮らしを通して ——

野上貴史，馬場啓子，松木香代子

社会福祉法人守里会

【目的】 認知症を発症すると介護される立場となる。しかし人が本来もつ感情、喜びや悲しみ、驚きや優しさなどをを感じる心は決して衰えてしまうことはない。いやもしくはすると、発症以前よりもあらゆるものを感じる心は研ぎ澄まされ、新しい出会いや経験に対しても心のまま、感じたままに思いを表出させることができるのではないか。当事業所（20名）での様々な利用者の暮らしを通して、認知症発症者に本当に必要な介護とは何か、安心して暮らせる環境とはどのようなものなのか検証する。

【倫理的配慮】 発表にあたり関係者・管理者の承諾を得、個人情報及び秘密保持についての配慮を行っている。

【方法】 当事業所での物的環境と人的環境の相関関係を検証する。それら環境における認知症利用者との利用者ととの関わりを検証する。

事例 男性 パーキンソン病 介護度 4  
 男性 ピック病 要介護度 3  
 女性 アルツハイマー型認知症 要介護度 3  
 男性 脳血管性認知症 要介護度 4

【結果】 認知症発症者の周辺症状は落ち着き、数名の利用者の介護度が改善された。

男性 パーキンソン病 要介護度 4→3  
 男性 ピック病 要介護度 3→1  
 女性 アルツハイマー型認知症 要介護度 3→2  
 男性 脳血管性認知症 要介護度 4→3 など

【考察】 介護する側が利用者を特別視し必要な介護を追求・提供するのではなく、「共に暮らす」という視点に立ち、利用者同士が安心して暮らすことのできる環境を自ら獲得できる為の「関わらない支援」が必要である。